



Title	発話にあることばに対する理解の表示と認識の交渉— タンデム学習の会話を中心に一
Author(s)	蔡, 真彦
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/98704
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (蔡 真 彦)	
論文題名	発話にあることばに対する理解の表示と認識の交渉 —タンデム学習の会話を中心に—
<p>論文内容の要旨</p> <p>本研究は、タンデム学習という互いの得意な言語を学び合う活動の会話を例に、会話参加者による発話にあることばに対する理解の表示と認識の交渉について、会話分析の手法で分析し、このような理解の表示と認識の交渉、及び「学習者」と「パートナー」のカテゴリーとの関連について考察したものである。</p> <p>本論文は全部で5部から構成されている。まず、第1部の序論（第1-4章）において、本研究の研究対象と研究目的、先行研究、調査概要及び分析の枠組みについて説明する。次に、第2-4部において、発話にあることばに対する理解の表示と認識の交渉を中心に、(1)自身の発話の場合、(2)相手の発話の場合、(3)テキストを読み上げる発話の場合に分け分析を行う。最後の第5部において、分析結果を踏まえて「学習者」と「パートナー」のカテゴリーの構築と変化について考察を行い、本研究の結論をまとめ、今後の課題を提示する。</p> <p>第1章では、本研究の研究対象「発話にあることばに対する理解の表示と認識の交渉」について説明し、筆者のタンデム学習活動の参加経験を振り返りながら研究の動機と研究目的について述べる。また、本研究のリサーチクエスション（RQ）を次のように提示する：1. タンデム学習において、発話にあることばに対する理解の表示・認識の交渉の手続きは何なのか。2. RQ1で見られる手続きを通し、タンデム学習参加者はどのような理解を表示し、どのような認識について交渉しているのか。3. 自身の発話・相手の発話・テキストを読み上げる発話にあることばに対し、理解の表示・認識の交渉の手続きにはどのような特徴があり、それはなぜなのか。4. 発話にあることばに対する理解の表示・認識の交渉と、「学習者」・「パートナー」としての役割を表現することとの間にはどのような関連があるのか。</p> <p>第2章では、本研究が着目する会話における理解の表示と認識の交渉を中心に先行研究をまとめ、本研究の位置づけを説明する。会話における「理解」と「認識（epistemics）」は即時的に示される側面がある。先行研究においては、会話において理解を主張する、または立証することが可能であること、また、話者は認識的ステータス（epistemic status）と認識的スタンス（epistemic stance）を多様な言語・非言語資源を用いて表現することが明らかになっている。そして、第二言語学習の会話における話者による認識の表示・行為・「母語話者/非母語話者」のカテゴリーの表示がある程度関連していることが明らかになっている。本研究は、「タンデム学習」の会話を例に、参加者による「発話にあることば」に対する理解の表示と認識の交渉に着目し、分析を行う。</p> <p>第3章では、本研究の調査概要について述べる。まず、タンデム学習の定義・方式を紹介し、タンデム学習活動の会話を取り上げる理由を述べる。その後、本研究が取り扱うタンデム学習プロジェクトのスケジュールを説明し、会話参加者情報を提示する。</p> <p>第4章では、本研究の分析の枠組みについて説明する。まず、本研究の分析に用いられる研究方法・会話分析（conversation analysis, CA, Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974; Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977）の概要について触れ、本研究で使用される分析の鍵概念について述べる。次に、先行研究で指摘された制度的場面の会話の特徴と比較し、タンデム学習という場面の会話の特徴を述べ、本研究の分析の構成について説明する。さらに、本研究における「学習者」・「パートナー」という用語を定義し、最後に文字化の規則を提示する。</p> <p>第5章では、トライマーカー（try-marker, Sacks & Schegloff, 1979）の使用による自身の発話にあることばに対する認識の表示に着目する。タンデム学習参加者によるトライマーカーの使用は、先行研究で指摘された「固有名詞＋上昇イントネーション＋短いポーズ」の形式のみならず、様々な言語項目に対して行われていることが観察された。また、トライマーカーに対して肯定的な返答がなされた場合、理解の表示と認識の交渉の副次連鎖は最小限に食い止められ、本題連鎖の進行性への妨害が最小限になる。そして、学習者はトライマーカーの使用を通して自身の発話にあることばに対するK-の認識的ステータスを表現し、パートナーは返答する際に自身の理解を主張・立証することが見られた。それに対し、パートナーはトライマーカーの使用を通して自身の発話にあることばに対する不確実な認識</p>	

的スタンスを示し、学習者が理解を示す空間を自身の発話の中に創り出している。ただし、トライマーカーの使用は明確に「発話にあることば」に対する認識を表現する手続きではない限界が存在していることについて述べた。

第6章では、パートナーの発話に対し、学習者が他者修復を開始し、パートナーがことばの説明で自己修復する会話連鎖について分析を行う。学習者による他者修復の開始ーパートナーによる自己修復の連鎖が、パートナーがことばの説明で自己修復するまで2、3回繰り返されることが見られた。その理由について、他者修復の開始方法によって示される学習者の認識が異なることが考えられる。多様な他者修復の開始方法の中に、無限定の質問・枠づけ・トラブル源通りにまたはトラブル源を間違えて繰り返す方法によって示される認識の程度が低いのに対し、トラブル源のことばを未活用の形式で繰り返す方法と理解チェックという方法はある程度知っている認識的スタンスを示し、「トラブル源の繰り返し+疑問詞」という方法は、話者の認識的ステータスがK-であることを示している。そのため、学習者が明確にパートナーの発話にあることばに対する認識を表現する方法で他者修復を開始することが、パートナーによることばの説明を引き出す有効な手段に思われることについて述べた。

第7章では、パートナーが他者修復を開始することに着目し、パートナーによる他者修復を開始する方法、及び修復を行う主体と方法について分析を行う。パートナーが他者修復を開始した後、学習者による自己修復も見られたが、パートナーが「理解チェック」の方法で他者修復を開始すると同時に他者修復を行うこと、つまり、パートナーは理解チェックの方法で学習者の発話にあることばが正確ではない可能性があることを指摘することが見られた。ただし、このようなパートナーによる他者修復は、学習者による受け入れが必要である。また、第6章で見た学習者による他者修復の開始と比較し、(1)他者修復の開始において、理解チェックというK+の認識的ステータスを表現する方法はパートナーが学習者より多く使用している、(2)パートナーによる他者修復が見られるのに対し、学習者による他者修復が見られないという2点から、パートナーは学習者と比較して「知っている」ことを多く示しているのであることについて述べた。

第8章では、日常会話を交わすのではなく、テキストを読み上げるときのタンデム学習の会話を取り上げる。タンデム学習におけるテキストの読み上げ活動は「読み上げ-読み方の訂正-意味の説明」という構造を有し、協働的に行われる活動である。また、学習者は小声や音伸ばしなどのパラ言語的資源及び言い淀みやことば探しなどの行為で読み上げを中断すること、または、読み上げる前に質問する方法で自身の認識的ステータスがK-であることを示すことが観察された。その後、パートナーは読み方を訂正し、意味を説明する。そして、読み方の訂正と意味の説明において、学習者は自己訂正・説明要求を通してある程度知っているという認識的スタンスを示すことが見られ、パートナーは学習者の認識状況に合わせて読み方を訂正・意味を説明することが見られる。さらに、読み方の訂正と意味の説明の後にそれに関する話題展開において、二人は「学習者」・「パートナー」としてのカテゴリーを維持しなくなったり、逆転させたりすることが観察された。

第9章では、第5-8章の分析結果をまとめ、発話にあることばに対する理解の表示と認識の交渉、及び「学習者」と「パートナー」のカテゴリーとの関連について考察する。まず、「学習者」と「パートナー」といったカテゴリーは固定的なものではなく、理解の表示と認識の交渉の過程における流動的なものであることが明らかになった。また、参加者は「学習者」としてK-の認識的ステータスを表示するほかに、相手が自身の認識状況に合わせて行動するために、ある程度知っているという認識的スタンスと認識の変化を示すことと、認識状態の変化を言語化することで認識の交渉の連鎖を終了する合図を送ることができる。そして、参加者は「パートナー」としてK+の認識的ステータスを示すと同時に、非断定的な認識的スタンスを表出し、「パートナー」としての認識的権威 (epistemic authority) の主張を避けることも多く見られる。さらに、互いの得意言語と母語の間の切り換えによって、または媒介言語と学習対象の言語に対する認識の表示の切り換えによって、タンデム学習参加者は「学習者」・「パートナー」のカテゴリーを切り換えることができることについて述べた。

最後の第10章では、各リサーチクエスションに対する結論を提示し、今後の課題について述べた。本研究はタンデム学習の会話を例に、参加者による発話にあることばに対する理解の表示と認識の交渉の会話連鎖を記述し、理解の表示と認識の交渉のための手続き及び「学習者」・「パートナー」のカテゴリーの構築・変化について分析・考察した。その結果は、タンデム学習をはじめとする参加者が協働的に行われる言語学習活動において、参加者がいかに自身の言語学習への志向を相手に伝え、言語学習の効率を高めるかという課題を解明することへ貢献できると考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (蔡 真 彦)				
	(職)	氏 名		
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	BURDELSKI Matthew James	
	副 査	大阪大学 教授	高 木 千 恵	
	副 査	大阪大学 教授	渋谷 勝己	
	副 査			
論文審査の結果の要旨				
<p>以下、本文別紙</p>				

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 発話にあることばに対する理解の表示と認識の交渉
ータンデム学習の会話を中心にー

学位申請者 蔡 真彦

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 BURDELSKI Matthew James

副査 大阪大学教授 高木 千恵

副査 大阪大学教授 渋谷 勝己

【論文内容の要旨】

本論文は、日本の大学におけるタンデム学習という「互いの得意な言語を学び合う活動」を対象とし、会話分析の手法を用いて、その活動における日本語母語話者（以下、パートナー）と日本語非母語話者（以下、学習者）による「理解の表示」と「認識の交渉」について分析・考察を行った量的・質的研究である。序論と参考文献等を含め A4 判 142 ページからなっている。まず、第 1 章「研究対象と研究目的」では、筆者自身が学習者と運営スタッフとしてタンデム学習に参加した経験を述べて、本研究の Research・Question を挙げている。第 2 章「先行研究と問題のありか」では、タンデム学習における理解の表示と認識の交渉を分析するための準備として、会話における理解と認識といった 2 つの概念を紹介し、特に会話分析の専門用語である「認識的ステータス」と「認識的スタンス」を説明しながら先行研究を整理している。第 3 章「調査概要」では、タンデム学習の詳細を述べた後、分析の対象とする協力者（6 組）の情報や調査状況を挙げている。第 4 章「分析の枠組み」では、初めに会話分析の概要を説明し、続いて本論文の方法論を提示した後、トランスクリプトの文字化の規則を記述している。第 5 章「トライマーカーの使用」では、両者の発話に見られる「名詞句＋上昇調イントネーション」といったトライマーカー（例 1：学習者「ドライ？」、例 2：パートナー「竹？」）に着目し、その事例数や機能、そしてそれに対する相手の反応などを分析したうえで、トライマーカーが理解の表示と認識の交渉にどのように貢献するのかを考察している。第 6 章と第 7 章は「修復」について分析を行っている。まず、第 6 章「学習者による他者開始：パートナーがことばの説明で自己修復する場合」では、ことばの説明に導く学習者による修復の開始とパートナーによることばの意味の説明（いわゆる「他者開始・自己修復」）（例：学習者「かしこまる？」→パートナー「すごい真面目というか、厳粛な」）に着目し、修復開始とことばの説明の方法やそれぞれの頻度を分析している。そのうえで、理解の表示と認知の交渉に重点を置きながら様々な修復開始の方法が母語話者（パートナー）によることばの説明を引き出せる有効な手続きであるのではないかと考察している。次に第 7 章「パートナーによる他者開始・学習者・パートナーによる修復」では、ことばの意味や使い方の説明に導くパートナーによる修復の開始及び学習者による修復（いわゆる「他者開始・他者修復」及び「他者開始・自己修復」）（「他者開始・他者修復の例：学習者「口笛？」→パートナー「笛ですか。笛は持ってます。」）に着目し、他者開始・他者（または自己）修復は説明要求（例：パートナー「魔性ってどういう意味？」）や訂正（例：パートナー「ロマニア？ルーマニア」）として機能し、「パートナーによる他者開始」はことばの理解の表示と認識の交渉にとって重要な手続きであると議論されて

いる。第8章「テキストの読み上げ-フィードバック」では、学習者によるテキストの読み上げとパートナーによる訂正やことばの意味の説明を分析し、テキストの読み上げが理解の表示と認識の交渉にとって重要な場であることを考察している。第9章「考察」と第10章「まとめと今後の課題」では、データ分析を踏まえた上で、リサーチ・クエスチョンに回答し、教育面での主張を行いつつ、今後の課題を提示している。

【論文審査の結果の要旨】

近年、会話分析の視点から第二言語の学習者が研究対象とされるようになったが、この視点から行われた第二言語としての日本語学習者に関する研究はまだ非常に少ない。このような背景から、本論文を高く評価できるところは次の2点である。まず1点目は、国際交流や第二言語学習の支援の一環として行われるタンデム学習に着目することで、一つの活動時間の中で複数の言語（日本語、中国語、英語など）が使用される会話データ（対面とオンライン）において、実際にどのように学習者の日常生活の日本語やアカデミックな日本語の学習が促されるのか、また学習者とパートナーの間でどのようにことばの理解の表示と認識の交渉を行うのか、明らかにしたところである。特に、ことばの意味を知らない（「メジャーってなに？」）または確信がないことばの使い方（「dry-ドライ？言いますか」）に対する学習者の実践（トライマーカーの使用や修復開始など）を分析したことで、そのことばの意味や使い方を能動的に認識し、定着させようとする学習者のエージェンシーを示し、さらに自分の学習をコントロールするための能力があることを確認しており、「学習者の自律性(learner autonomy)」、「第二言語習得のための会話分析(CA for SLA)」や「会話におけるコード切り替え/コードミキシング(code switching/mixing in conversation)」などといった様々な研究分野に貢献できると思われる。2点目は、実際の会話を収録したことで、インタビュー調査に基づいたタンデム学習に関する従来の研究では見逃されてきた「エキスパート」・「ノヴィス」というカテゴリーの流動性を明らかにしたところである。本研究の分析からは、学習者とパートナーの役割分担（パートナー＝教える側、学習者＝教えられる側）は固定的ではなく、会話の中で自在に入れ替わるものであるという重要な指摘がなされている。特に、学習者が日本語を媒介語として使用し、パートナーにとって未知の情報（母国のことば・文化等）を説明する場合などは、学習者は教える立場になるという事実は、第二言語学習に対する「動機付け (motivation)」といった研究分野にも貢献できるのではないと思われる。以上の結果を踏まえ、本論文は、タンデム学習が大変有意義な教室外の活動であり、国際交流や言語学習の援助の一環として継続すべきであることを強く主張している。なお、論文の構成という面からも、リサーチ・クエスチョンの設定、データの分析、考察、今後の課題の整理も、参考文献の広範なレビューを踏まえ、論文全体を通して明解に行われている。

ただし、本論文に問題点がないわけではない。本論文では会話分析の観点からタンデム学習に見られる実践を分析することによって理解の表示や認識の交渉を解明することを試みているが、最終的にどの研究分野に本研究を位置付けたいのか、どの分野に成果を発信していきたいのか、曖昧な点がある。上述のように本研究で明らかにしたことは、応用日本語学（第二言語習得のための会話分析等）に資するものであり、この点についての明確なフィードバックを結論部に入れ込むことが望まれた。また、タンデム学習における実践（トライマーカーの使用、修復、訂正など）は明らかにされているものの、その結果を踏まえた考察では事実をふまえたより大きな視点からのディスカッションがほしいところであった。これらの問題点を改善していけば、よりタンデム学習の意義を解明できるのではないと思われる。

とはいえ、本論文は従来焦点が当てられてこなかったタンデム学習の会話および会話における理解の表示と認識の交渉に着目し、会話分析の観点から第二言語社会化の過程を探究した一つの重要な研究に仕上がっており、今後、この分野を研究する研究者にとってまず参照すべき論文となることは間違いない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。